

地域とともに「守る」・「伝える」心を育む教育活動の実践 ～総合的な学習の時間における伝統や文化の継承を通して～

館林市立第四小学校
教諭 岡松 亮

1 はじめに

館林市立第四小学校は明治6年に「敬身学舎」として創立され、今年度148年目を迎える長い歴史と伝統に支えられた学校である。渡良瀬川が近くを流れる市の北東部に位置し、周辺を田園に囲まれた豊かな自然に恵まれる児童数63名の小規模校である。教育目標として「豊かな心と優れた知力をもち、心身ともにたくましく生きる児童の育成」を掲げ、児童の健全育成に努めているほか、平成30年度から現在まで館林市コミュニティ・スクール¹モデル校に指定されるなかで、年4回の学校運営協議会を開き、「連携・協働」を重点に地域住民と学校課題や目標を共有し、解決に努めている。

本校の特色ある教育活動の一つとして、音楽科における「箏」を扱う学習を現行の学習指導要領に先駆けて第3学年から継続的に実践してきた。当初は、和楽器に親しむことを目標とするものであったが、令和元年度に館林市教育委員会の小規模特認校として指定を受けたことから、箏を中心として伝統や文化を重視する教育活動をコミュニティ・スクールの地域連携とともに、教育課程の柱の一つとして位置付けることとし、特に第6学年の総合的な学習の時間においては「地域とともに伝統や文化を守る・伝える～箏の音色を届けよう～」という単元を設定して、地域の教育力を生かした学校全体としての取組とした。

本稿では、児童と地域が箏の演奏を通して共に伝統や文化のよさを共有し、継承していくことを目指した活動の実践内容と成果について述べていく。

2 主題設定の理由

平成29年7月告示の学習指導要領では、国際社会で活躍する日本人の育成を図るため、各教科等において、我が国や郷土の文化や伝統を受け止め、それを継承・発展させるための教育を充実する観点から、教育内容を改善することを示している。また、学習指導要領『『総合的な学習の時間（解説）』第5章、指導計画の作成と内容の取扱い』のなかで、以下の内容に配慮することとしている。

目標を実現するにふさわしい探究課題については、学校の実態に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題、児童の興味・関心に基づく課題などを踏まえて設定すること。

このことから、「伝統や文化に関する教育」は各教科等で充実に向けて取組を行っていくとともに、児童や学校、地域の実態等を考慮し、各学校の特色を生かしながら、教科等横断的な視点で充実を図っていくことが一層求められていることが分かる。

本校では、平成30年度に音楽科の学習のなかで、地域に住む箏曲演奏家をゲストティーチャーとする箏の演奏体験を開始した。また、令和元年度には県内から使わなくなった箏を寄付していただいたことにより、児童一人に対して箏を一面、日常的に扱い親しめる環境が整った。箏は、特有の深みのある音色、合奏した際に一体感を味わえることから、児童にとっては魅力的な楽器の一つであり、それぞれの児童が意欲的に取り組んでいた。しかし、音楽科における扱いに限定すると、充当できる時数の関係から「箏の体験」にとど

まり、体験から伝統や文化についての理解を深め、教科等横断的な視野を広げるまでには至らなかった。そこで、以下2点を視点として、第6学年の総合的な学習の時間において「箏」に係る探究的な学習を位置付けた。

(1) 伝統や文化のよさを「守る」視点

コミュニティ・スクールとしての利点を生かし、ゲストティーチャーによる専門的な指導、地域の人々との協働学習、異校種間連携を「総合的な学習の時間」の活動方針とすることで、児童の伝統や文化を「守る」意識が醸成されると考えた。

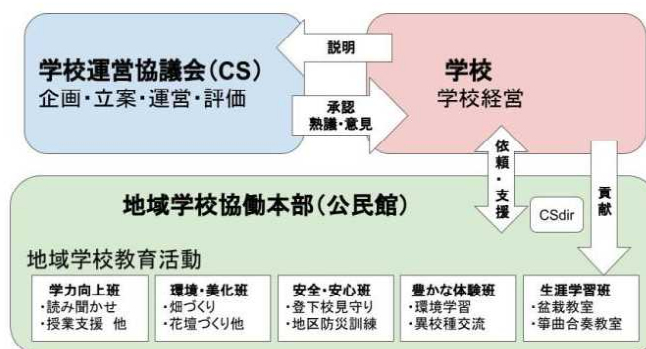
(2) 伝統や文化のよさを「伝える」視点

箏を演奏し、伝統や文化に触れる体験活動を地域の人々と一緒に行ったり、「まとめ・表現」の過程における発表の場を地域の公民館に設定したりすることで、児童の伝統や文化のよさを「伝える」意欲や態度が醸成されると考えた。

3 実践に向けた学習環境の整備

(1) コミュニティ・スクールとしての位置付けの明確化

本校では、学校運営協議会制度（資料1）を導入して4年目を迎える。地域学校協働本部を隣接する大島公民館に設置し「学力向上班」、「環境・美化班」、「安全・安心班」、「豊かな体験班」、「生涯学習班」の5つのグループを設け、地域や保護者の方々が日常的に教育活動に参画している。前者の4つは学校が地域から学ぶ場として、後者の「生涯学習班」は、学校での学びを地域に提供する場として位置付けている。このように地域と学校とが目指す児童像を共有し、地域の教育力の活性化に向け取組を進めるなかで、箏の演奏を「豊かな体験班」と「生涯学習班」の両方に位置付けることで、児童や学校と地域との相互に「守る」・「伝える」心を醸成することができると考えた。



資料1 学校運営協議会制度組織図

(2) 楽器や教室の活用

本校には当初、箏は一面しかなく近隣中学校から借用し体験活動を行っていた。しかし、児童は箏を継続的に演奏したいという思いを強くもっていた。そこで、令和元年度に地元新聞社の協力を得て、使用していない箏の寄付を呼びかける記事を掲載いただいたところ、県内外各地から60面以上の寄付が集まり、日常的に演奏できる面数を揃えることができた。年度末には、寄付していただいた方々への感謝の気持ちを込めた演奏会を開き、その様子は新聞でも紹介された。記事の中で当時6年児童は「全員で演奏できることがうれしい。箏を譲ってくれた人のためにも一生懸命練習し、仲間と最高の演奏にしたい¹⁾」と語った。



資料2 箏曲合奏室

令和2年度には、総合的な学習の時間に位置付けると同時に、空き教室を利用し常時演奏できる学習の場として、「箏曲合奏室」（資料2）を校内に整備した。箏曲合奏室は、学習する場である一方、「表現・まとめ」の場面では成果を披露する場にもなるため、床に毛氈を敷くことで伝統や文化を感じられるよう工夫し、他校には珍しい特色ある教室となっている。

(3) 地域の箏曲演奏家による専門的な指導

毎月1～2回程、地域の箏曲演奏家をゲストティーチャーに迎え、箏の奏法や楽譜の読み方など専門的な指導(資料3)を行っていただいているほか、児童の質問に対して地域の専門家の立場から答えていただいている。



資料3 ゲストティーチャーの指導

本校の教職員には、伝統楽器の演奏経験をもつ者は少なく、日々の授業の中での指導に悩む場面も多かった。しかし、ゲストティーチャーと連携を図ることで、技能の習得だけでなく、専門家の方々の伝統や文化を守り、伝えることが重要であるということを学校全体で認識するようになった。

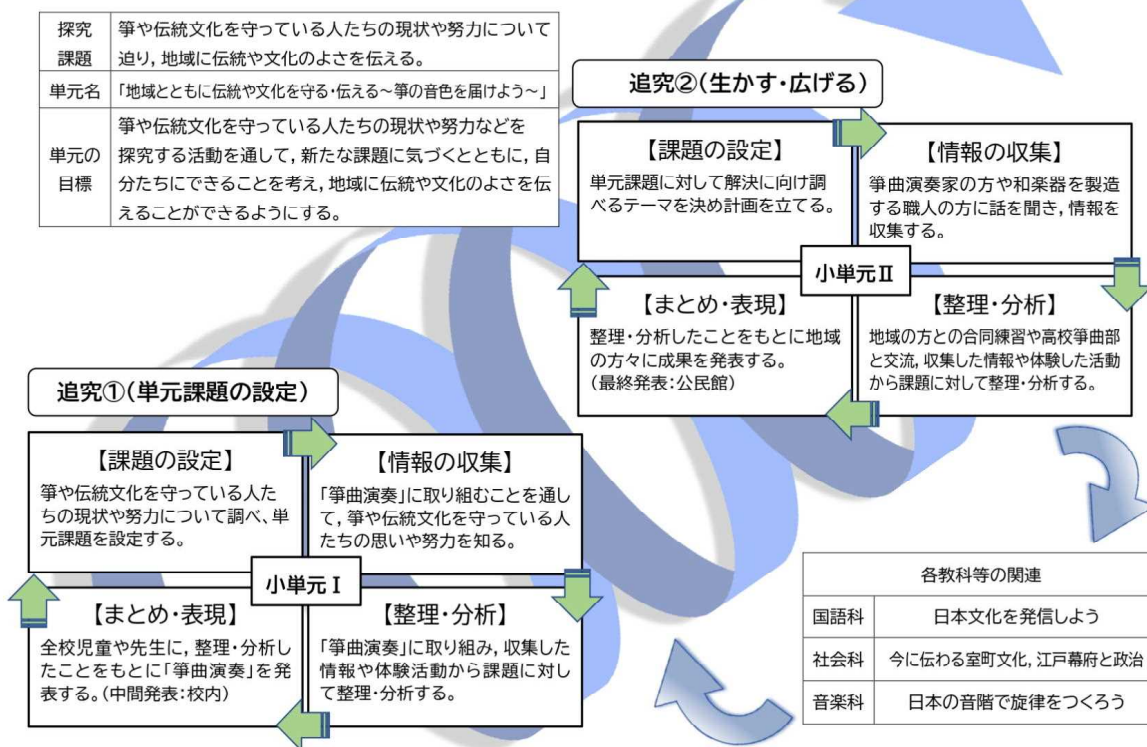
4 実践

(1) 概要

対 象：第6学年 総合的な学習の時間

単元名：地域とともに伝統や文化を守る・伝える～箏の音色を届けよう～

第6学年 総合的な学習の時間 単元構想図



資料4 第6学年単元構想図

本校では、総合的な学習の時間の教育活動の基本的な在り方を示すため、「学校の教育目標」、「目標を実現するためにふさわしい探究課題」、「探究課題を解決して育成を目指す具体的な資質・能力」を三要素として、全体計画を作成している。学校の教育目標である「豊かな心と優れた知力を持ち、心身ともにたくましく生きる児童の育成」を柱に、探究課題を「箏や伝統文化を守っている人たちの現状や努力について迫り、地域に伝統や文化のよさを伝える」とした。また、単元構想図(資料4)をもとに学びが往還的に深まるよう、小単元では「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の4つの学習過程を設定している。各学習過程では、自己の考えを練り直し、再構築しながら

よりよい解決に向けた学習活動を展開できるよう、地域人材の活用、異校種間連携・交流を指導計画に位置付けた。また、体験活動の充実を図るとともに、探究課題を教科等横断的に追究できるよう意識した。単元全体を通して、個と集団の学びが深まるよう、個別の探究場面、協働的な探究場面においてICTを効果的に活用して学習を進めた。大単元を小単元Ⅰ及びⅡで構成し、それぞれ「伝統や文化のよさを見つけよう」、「地域に伝統や文化のよさを伝えよう」として扱うこととした。

（２）小単元Ⅰ「伝統や文化のよさを見つけよう」

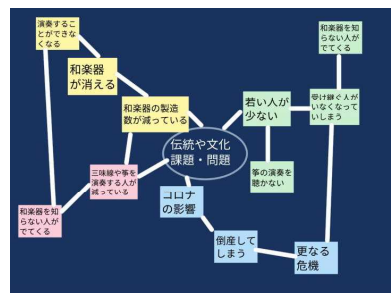
「課題の設定」では、「日本の伝統や文化と聞いて思い浮かぶもの」についてアンケートを実施することから、単元全体の追究課題を構想することとした。アンケート結果をテキストマイニング²²で視覚化することで、児童にとって「箏」が身近な伝統や文化であることを共有できた（資料5）。その結果からインターネットを活用した情報収集により、箏や日本の伝統楽器の現状や課題について児童は、主に以下の2点に着目して情報を整理した。



資料5 頻出語の抽出

- ①伝統楽器の製造数は年々減り続けていること
三味線は1970年に18,000棹製造されていたのが2017年には3,400棹に、箏は25,800面から3,900面ほどしか製造されていない²⁾
- ②新型コロナウイルス感染症の影響により和楽器メーカーが倒産の危機であること
以下、専門家によるコメント
「1社の廃業でなく、日本文化の危機。修理に時間がかかるなど、いろいろなところに影響が出ると思う。文化に対する国の予算も先進国では最低。東京和楽器の職人は国の宝と考えるべきだ³⁾」

児童は、普段から慣れ親しんでいる箏や伝統楽器の思いがけない現実を目の前にし、その課題を明らかにするため考える技法の一つであるウェビング（資料6）を用いて整理した。ほかの児童のウェビングと比較したり、共有したりすることで、学習の終末には「校内で箏を演奏し、伝統や文化のよさを伝える」という追究課題を設定し、自分事として課題を追究していこうとする姿が見られた。



資料6 ウェビングでの整理

「情報の収集」では、日本の伝統的な楽器、芸能、食、芸術など児童それぞれがテーマを決め、学校の図書室やインターネットを活用したり、ゲストティーチャーである地域の箏曲演奏家に疑問点を質問したりするなどして調査を進めた。

琴って、なんだ？ みなさんは、江戸時代にどんな人が琴を弾いていたか知っていますか？

伝統的な和楽器 箏 箏は、奈良時代中国から日本に伝えられたといわれています。当初は、「雅楽」という音楽で使われる楽器でした。箏の音色が多くの人に広まったのは、江戸時代のことでした。この時代に「三味線」が流行し、箏の演奏も盛んになりました。それに対して「雅楽」から分かったこととして、品数の多い楽器として武家の間で広まりました。上品で、優雅な琴を習うことは、武家や富裕階級の家の娘の、たしなみとされていました。

箏は、魔除けのかざり物 箏は、楽器としてだけでなく、魔除けの飾り物としての役割があります。古い時代箏は神楽を招くために演奏されていました。昔は船が壊れるときに持たせたり、家を、新築したときやお祝いするときに、身なりした。箏は、家の中でも一番格式の高いとされる「床の間」に、飾られていました。

部位によって名前がある 箏の長さは一さしセンチ柱は、強に、立てて音の高さをかえます。龍角、龍頭、龍尾など箏は柱にたてて作られたことから部位には「龍」という言葉が付きまします。

「整理・分析」では、国語科「日本文化を発信しよう」の単元と関連付け、収集した情報をもとに構成や割り付けを工夫したパンフレットを作成（資料7）し、他学年の児童にも見てもらえるよう、図書室に掲示した。

資料7 児童作成パンフレット

また小単元Ⅰでは、2人の箏曲演奏家を招き、箏曲演奏の披露と箏の成り立ちや奏法、楽譜の読み方など、演習を交えながら児童に分かりやすく説明していただいた。

小単元Ⅰのゴールである「まとめ・表現」では、一学期終業式に全校児童に箏曲演奏を披露し、これまでの成果を発表した（資料８）。成果発表後の児童の振り返りには、「和楽器の魅力をもっとたくさんの人に知ってほしい」、「校内以外のたくさんの人に箏のよさを伝えたい」などの記述が見られ、学習以前より伝統や文化に対する興味・関心が高まっていることが分かった。



資料８ 小単元Ⅰ 成果発表会

（３）小単元Ⅱ「地域に伝統や文化のよさを伝えよう」

i 課題の設定

「校内に伝統や文化のよさを伝える」ことを追究課題とした小単元Ⅰでは、校内で成果を発表することに対して達成感や充実感を得ていた一方で、振り返りの記述には「箏のよさを校内に伝えただけでは日本の伝統や文化を守ることにはつながらない」、「校内だけでなくより多くの人に伝えたい」などの意見が見られた。そこで、小単元Ⅱ（資料９）では、小単元Ⅰの取組をより広げていくために新たな課題を設定することとした。伝統や文化のよさをより広く伝えていくためには、どのような追究課題を立てたらよいか小グループで話し合った結果、「地域に伝統や文化のよさを伝える」ことを新たな追究課題とし、隣接する大島公民館に地域の方を招いた成果発表会を行うこととした。そして、第３学年から親しんできた箏を自分たちが演奏し、地域の方に聴いてもらうことで日本の伝統や文化のよさを伝えることができるのではないかとこの共通理解を見出した。

学習過程	時	学習活動
課題の設定	1	地域の箏曲演奏家や和楽器職人の話から、日本の伝統や文化の問題状況について知る。
	2	問題状況から、「自分たちにはできることは何か」の視点で追究課題を立てる。
情報の収集	3	追究課題について解決（成果発表会）に向けて調べるテーマ決め、調査活動の計画を立てる。
整理・分析	4 15	成果発表会に向けて「箏曲演奏」の練習に取り組む。 ※地域の方との合同練習（「箏曲合奏教室」）
	16	情報の整理・分析の過程で生まれた新たな疑問について、地域の高校箏曲部と交流をし、再調査する。
まとめ・表現	17	これまで調べてきたこと、「箏曲演奏」の成果を地域住民の方に発表し、伝統や文化のよさを共有する。 ※公民館での成果披露発表 ※地域幼稚園児を招いた「ひな祭りコンサート」

資料９ 小単元Ⅱ 学習計画

ii 情報の収集

伝統楽器と日本の伝統や文化の現状や問題点について、小単元Ⅰにおけるインターネットを活用した情報収集から発展させて、日頃から箏の修理を依頼している和楽器製作者に児童が質問することとした。その回答には、「現代では、家から和室が減り、たしなみとして三味線や箏を稽古する習慣も時代とともに消えている。演奏を習得するまでに長い稽古が必要であり、日々の忙しさなどから離れる人が増えた」とあり、伝統を守る職人の視点から新たな情報を得られた。

iii 整理・分析

近隣の館林女子高等学校箏曲部を本校に招き、交流（資料１０）を行った。交流内容として、高校生による箏曲演奏の披露、児童との合同演奏、意見交流などである。交流会の中で箏曲部の部長は「私たちが演奏することで箏の魅力が伝えることができる。これからも続けてほしい」と話し、高校生との交流を通して地域で成果発表会を行う意義を明確にすることができた。



資料１０ 高校生との交流

箏曲部との交流については、収集した情報を整理する中で直面する新たな疑問や問いに対し、児童と同じ箏の演奏を行う学習者の視点で「整理・分析」のヒントとなるよう、時

期を工夫している。高校生は小学生にも伝わる言葉で丁寧に教えたり，児童の疑問に対して一緒に考えたりするなど，意欲的に参加する姿勢が見られ，相互に教育的効果を感じられる交流となっている。

これらの「整理・分析」と並行して，地域の方々の参加を募り「箏曲合奏教室」として，大島公民館での成果発表会に向けた練習を児童と共に取り組んだ。児童はこれまでの学びを生かしながら，箏の奏法や楽譜の読み方を自ら教えたり，箏の魅力を伝えたりする様子（資料11）が見られた。地域の方と児童が共に箏曲演奏に取り組むことで，伝統や文化のよさを伝えるという探究課題を共有することができた。箏曲合奏教室は，コミュニティ・スクールの「生涯学習班」に位置付けられ学校が提供している活動の一つであり，地域の参加者からは，「いつか演奏してみたかった箏を子どもたちと一緒に演奏できる機会ができて嬉しい」などの感想をいただいた。児童は「最初は緊張したけど上手にできたと思う。もっと多くの人に楽しんでもらいたい⁴⁾」と，箏曲合奏教室を心待ちにしており，今後も継続して取り組んでいく予定である。



資料11 箏曲合奏教室

iv まとめ・表現

隣接する東幼稚園の園児を招いた「ひな祭りコンサート（資料12）と大島公民館での成果発表会（資料13）」二つの発表場面を設定した。発表の対象が異なることから，児童は，収集した情報の中から伝えるべき内容を精選し，伝え方を工夫して準備に当たった。例えば，ひな祭りコンサートでは，「うれしいひな祭り」，「うさぎ」などの箏曲演奏に加え，箏の歴史や桃の節句に関する情報をクイズ形式で発表し，幼稚園児にも楽しめる内容を工夫した。また，成果発表会では多くの地域の方を前にし，箏の魅力，伝統や文化に関する現状や問題点の報告，沖縄の旋律をモチーフにした楽曲を演奏した。会の最後には大きな拍手をいただき，児童はこれまでにない充実感と達成感を得ることができた。



資料12 園児との交流

以下，成果発表会の中で児童がお礼の言葉として話した内容である。

地域のみなさんが私たちの箏の演奏を聴いてくれてとてもうれしかったです。ここまで学習を進めてこられたのも，地域のみなさんが箏を教えてくださいましたり，一緒に箏の練習に参加して下さったり，いつも応援して下さるからです。

四小にはたくさんの箏があるので，これからも箏の演奏を通して日本の伝統文化のよさを伝えていきたいです。



資料13 成果発表会

5 各教科等との連携

(1) 国語科

「日本文化を発信しよう」の単元において，総合的な学習の時間，小単元Ⅰの「情報の収集」場面と関連付けて，日本の伝統や文化を紹介するパンフレットを作成した。箏，能楽，和食，年中行事などテーマごとに学校図書館やインターネットを活用して調べ，日本

文化のよさが伝わるように構成や絵、写真の見せ方を工夫し、読み手の興味を魅くようにまとめた。完成したパンフレットは「日本文化大辞典」とし、図書室の他学年児童の目に触れる位置に掲示した。

(2) 社会科

「今に伝わる室町文化」の單元において、ゲストティーチャーによる「茶の湯体験」(資料14)を行った。この体験では、今日的生活文化が室町文化から生まれたことを体験活動を通して理解することをねらいとしており、箏もこの時期に武士、僧侶へと広まり人々の生活に根付き始めたことを学習していたため、児童の関心も高かった。



資料14 茶の湯体験

ゲストティーチャーからは作法、お茶の立て方、心構えなどを教えていただき、体験の最後に「昔から受け継いできたお茶の文化が失われつつある。若い人たちに少しでもお茶の魅力が伝わればと思って教え続けている」と話してくださった。ゲストティーチャーの話から箏と同じように若い世代が茶の湯に親しむ機会が減っていることを知り、伝統や文化のよさを次の世代に伝える必要性を再認識することができた。

(3) 音楽科

第6学年「日本の音楽に親しもう」の題材において、箏で五音音階による旋律づくりを行った。音楽科では、第5学年までに郷土に伝わるお囃子や民謡といった、人々によって昔から守り伝えられてきた音楽を学習してきている。本題材では、総合的な学習の時間で学習している箏を教材に鑑賞と表現(音楽づくり)の関連を図り、日本の音階のもつ特徴や美しさから我が国の伝統的な音楽のよさを深められるよう題材を構成(資料15)した。

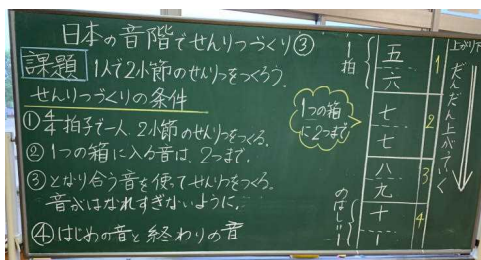
「つかむ」過程では、「春の海」を教材に日本の雰囲気醸し出す理由を五音音階の特徴から探り、グループでオリジナルの旋律をつくるという題材全体の課題を立てた。

「追究する」過程では、個人でつくった2小節のモチーフを持ち寄り、3人グループで旋律をつなぎ合わせた。「グループでつなぎ合わせると変な旋律になった」という児童の気付きから、旋律づくりの条件(資料16)を共有し合い、修正を加え、まとまりのある音楽へと深化させていった(資料17)。

題材名：日本の音楽に親しもう(全6時間)	
基本的な学習活動	
「つかむ」過程	<p>題材の課題を把握する(第1時)</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽を形づくっている要素(音色や旋律の関わり合い)の変化と曲の構成とを関連づけながら「春の海」を聴く。 音楽の雰囲気醸し出す理由をリズムや音階などに着目して交流し、五音音階について知る。 題材の課題をつかむ。 <p>日本の音階を使って自分たちだけのオリジナルの旋律を作ろう</p>
「追究する」過程	<p>音楽を形づくっている要素と思いや意図とを関連づけながら旋律をつくる(第2時～第5時)</p> <p>①3つの五音音階(「平調子」、「本雲井調子」、「沖繩調子」)を比較聴取し、個人でどんな旋律をつくりたいかという思いや意図をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 3つの五音音階を比較聴取し、音階の特徴からグループで1つ音階を選択する。 個人で2小節のまとまりのある旋律をつくる。 <p>②3人グループで旋律をつなぎ、「反復」や「対照」など音楽の仕組みを工夫してまとまりのある音楽をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人でつくった2小節のモチーフをグループでつなぎ合わせる。 まとまりのある音楽に深化する過程では、「反復」や「対照」などの音楽の仕組みを生かしながら旋律を修正する。
「まとめる」過程	<p>作品を発表し、題材の学びを振り返る(第6時)</p> <ul style="list-style-type: none"> グループごとに旋律を発表し、互いに演奏を聴き合う。 学級全体で各グループの旋律の面白さやよさなどを交流する。 題材全体の学びを振り返る。 <p>完成した各グループの旋律を学校ホームページに掲載</p>

資料15 題材構成

「まとめる」過程では、各グループで発表（資料18）を行い、後日学校のホームページに総合的な学習の時間の取組とともに、作品の音源を掲載した。



資料16 旋律づくりの条件



資料17 修正する様子



資料18 発表する様子

（4）文化庁「文化芸術による子供育成総合事業」

令和元年度は、公益社団法人宝生会による「能楽」、令和2年度には、京都能楽囃子方同明会による「能楽囃子」（資料19）と、二年続けて巡回公演を本校体育館で実施している。「能楽」の公演では、事前に能楽の歴史や舞台構造、音楽についての解説、児童が能面や衣装を身に付ける体験をワークショップ形式で行い、公演当日は体育館に能舞台を組み、能「黒塚」と狂言「柿山伏」を披露していただいた。実際に能楽堂にいるような雰囲気の中、児童は能役者の動作や表情の変化を真剣に鑑賞し、後半では演者と謡で共演した。「能楽囃子」の公演では、能楽における囃子方の役割や各楽器の解説、小鼓の実演、演習を行い、公演の最後に児童が小鼓の演奏を披露した。

実演家として活躍する方々の演技や演奏、佇まいなどから長い時代の中で受け継がれる日本の伝統や文化のよさを実体験として感じ取ることができた。以下、「能楽囃子」の公演で児童がお礼の言葉として話した内容である。

私たちのために能楽の楽しさや小鼓の演奏の仕方を教えてくださいありがとうございました。初めは小鼓を鳴らすことは難しかったです。練習を重ねるうちに上手く鳴らせるようになり、楽しさがわかるようになってきました。私たち6年生は箏の演奏をしているので、日本の伝統文化のよさをたくさんの人に知ってもらえるよう頑張っていきたいと思います。いつか本物の舞台を観にいきたいです。

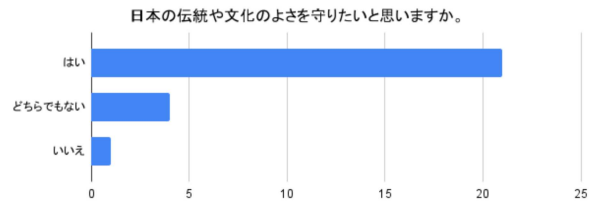
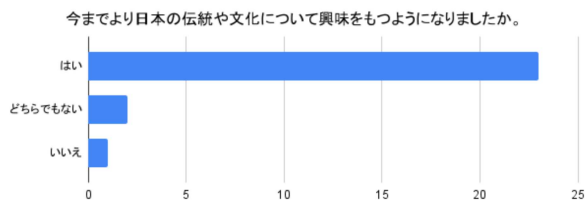


資料19 能楽囃子公演

6 実践の成果

（1）伝統や文化のよさを「守る」視点の成果として

児童の探究の深まりに応じて、和楽器製作者への調査、ゲストティーチャーによる専門的な指導、地域の人々との協働学習、異校種間連携を学習計画に位置付けたことは、児童の伝統や文化に対する興味・関心を高め、次の世代へ向けて「守る」意識を醸成することにつながった。このことは成果発表会後の実態調査結果（資料20）や振り返りの記述（資料21）から判断できる。学習当初は単に「箏の楽しさを伝えたい」という思いであったが、伝統楽器と日本の伝統や文化の現状や問題点を調査し、多様な立場で守る人たちと関わりながら探究課題に迫ることで「箏を演奏して、地域に伝統や文化のよさを伝えたい」という理解を伴った思いへと変容していった。



資料 2 0 実態調査結果

ぼくたちができることは、箏をひき、いろいろな人に広めていくことです。ぼくは箏が好きなので、大人になってもこのよさを伝えていきたいです。

この学習を通じて日本の伝統文化が消えつつあることを知り、私はいろいろな人にこの現じょうを伝えるためにも、下級生たちもことをす、とつづけていくことが大切だと思いました。

1年間、この学習をやってきて、私たちより下の子どもにもこのよさをもと知ってほしいと思うようになりました。四小には伝統文化が、たくさんあるのでつづけていきたいです。

資料 2 1 振り返りの記述

(2) 伝統や文化のよさを「伝える」視点の成果として

校内から地域へと段階的に「伝える」対象や発表場面を広げていったことは、相手意識と目的意識を明確にし、追究してきた考えや思いを主体的に表現しようとする児童の意欲や態度を醸成することにつながった。小単元Ⅰを経て、児童たちは「箏を演奏するだけでは伝統や文化のよさは伝わらない」という気付きから地域へと視野を広げ、小単元Ⅱ全体を通して「伝えたい」という思いが高まっていったからだと考える。結果として、地域への成果発表会という形で、箏の演奏を通して伝統や文化のよさを共有することができ、この取組が地域の伝統として根付いていくことを実感した。このことは成果発表会に参加した方の感想(資料 2 2)から判断できる。また、この学習の取組は地元新聞社やテレビ局など多くの取材を受け、大きな反響をいただいた。

素晴らしい発表をありがとうございました。今、振り返ると二年前、みなさんが初めて箏の演奏を披露してくれたとき本当に素敵な演奏であったことを覚えています。それから数年しか経っていないのに今日の演奏はみなさんの思いも伝わる演奏でした。四小にしかないこの「箏」をこれからも大切にして、後輩たちや大島地区にも伝えていってくださると嬉しく思います。そして、地域の前で披露できるほどの力をつけたことで、これから中学に行っても何でも挑戦すれば、できないことはないと思えるはずです。どうかこれからも「箏」を忘れず、できたら弾き続けて欲しいと思います。



資料 2 2 参加者の感想

7 まとめと今後の課題

箏の演奏は「伝統や文化のよさ」を伝える一つ的手段に過ぎず、その根幹には伝統や文化を守る人たちとの出会い、地域の方と取り組んだ「箏曲合奏教室」、高校生や幼稚園児との交流、応援してくれる地域の方々、それらが相互に関連し合い、児童の伝統や文化を守り、伝える思いを形にしてくれたのだと、実践を通して強く実感することができた。当時の6年児童は卒業式で、箏の演奏を披露し、多くの児童が「箏を演奏してきて本当によ

かった。温かく見守ってくれた地域に感謝したい」という言葉を残して卒業していった。総合的な学習の時間において「箏」に係る探究的な学習を地域や伝統を「守る」人たちと関わりながら取り組むことで、児童は期待されることの喜び、協力することや努力することの素晴らしさ、自分が地域社会に役立っていることを実感できたのではないかと考える。そして、この経験と実感は長い年月を経ても色あせない「伝える」心を育むことであると考える。

今後の課題として、「伝統や文化に関する教育」が第6学年の総合的な学習の時間で終始しないよう、第1学年からの各教科で「伝統や文化に関する教育」を扱う単元をより明確にし、発達段階を考慮した系統性のある教科等横断的な教育課程を編成する必要がある。また、総合的な学習の時間においては、「箏」に係る探究的な学習がより発展的で学習内容に深まりが見られるよう、第6学年までに地域の伝統や文化を探究課題として設定し、段階的に追究していくことも考えられる。

8 おわりに

「箏」に係る探究的な学習は学校だけで完結したのではなく、取組に賛同し様々な場面でご支援くださった箏曲演奏家の小林茂代先生、大出かおる様、神田郁恵様、和楽器製作者の中嶋由直様、地域学校協働本部として成果発表の機会くださった大島公民館の皆様、交流を快く受け入れてくださった県立館林女子高等学校箏曲部の皆様、東幼稚園の皆様、箏をご寄付いただいた県内外の皆様、いつも温かく応援して下さる地域の皆様をはじめとした多くの方々の思いが児童の学びを支え、「心」を育む教育活動へと発展しました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

長い歴史のなかで受け継がれる日本の伝統や文化のよさを学校と地域とが共に手を取り合い、未来の世代に継承していくことを願い、引き続き実践を重ねて参ります。

〈参考文献〉

- ・文部科学省．小学校学習指導要領，東洋館出版社，2020，
- ・文部科学省．小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編，東洋館出版社，2020，
- ・文部科学省．今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 小学校編，2021，
- ・志民一成．伝統や文化に関する教育の充実．初等教育資料，東洋館出版社，2020，995(7)，p2-3，
- ・群馬県教育委員会．はばたく群馬の指導プランⅡ，2020，

〈引用文献〉

- 1) “善意の琴合奏で感謝”. 上毛新聞. 2020-02-27,
- 2) “純邦楽、深刻な危機 箏の年間製造数はたったの3900”. 朝日新聞デジタル. 2019-02-25, <https://www.asahi.com/articles/ASM2M3W93M2MUCVL00Y.html>, (参照 2021-09-24)
- 3) “日本文化の危機 三味線の最大手「東京和楽器」が廃業へ”. 東京新聞web版. 2020-06-28, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/38357>, (参照 2021-09-24)
- 4) “琴で児童と住民交流”. 上毛新聞. 2020-09-15,

〈参考音源〉

- ・大島地区成果発表会 箏曲演奏披露 (2021-03-18)
<https://drive.google.com/file/d/103a3D3vBn2iW0uom6nklPbPkyZ4nNw05/view?usp=sharing>

*1 コミュニティ・スクール…学校運営協議会制度を取り入れた学校

*2 テキストマイニング…複数の記述から頻出語や特徴語を抽出するブラウザアプリケーション